



## 6 授業の概要

### (1) 主題について

家庭は、人格形成の基盤である。今日の家庭においては、少子化、核家族化が進み、生活のスタイルの変化に伴い、家庭の教育力も価値観とともに多様化している。

この発達段階においては、一層積極的に家庭生活にかかわることが求められる。家族の中での自分の立場や役割を知ることから、その一員として積極的に役に立とうとする精神が芽生え、家族のために役に立つ喜びが実感できるようになる。

小学校高学年になると、家庭科の授業の中で自分と家庭生活の関わりについて実践的な学習を行うようになる。このことと道徳の時間の密接な関連を図りながら、家族が相互に信頼関係と深い絆で結ばれていることを実感させ、家族の一員として役立とうとする態度を育てていきたい。

### (2) 自作資料活用のポイント

#### ア 他教科等との関連

児童が実感を伴って学習に参加できるよう、家庭科の学習内容である、衣食住や家族の生活などに関する実践的・体験的な活動を行った後に活用することが望ましい。本資料は、家庭科の題材である「できるようになったかな家庭の仕事」をきっかけに展開していく。そのため、5年生でその題材を行う時期に合わせて活用することも可能である。しかし、文中には、自分の役割として継続して取り組む主人公の姿が描かれているため、内容にこだわらず、いろいろな題材と関連させて取り組むとよい。

#### イ 中心場面の取扱いの工夫

高学年の〔4－(5)〕には「家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする」、中学校の〔4－(6)〕には「家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く」とある。したがって、単なる家族への感謝の気持ちだけでなく、自分も家族のために役に立とうとする気持ちについて話し合わせるように留意したい。

### (3) 指導過程の工夫

#### ア 導入及び展開後段の工夫

家庭科の学習と関連付けられる資料であるため、導入と展開後段で家庭での実践を踏まえて発言させたい。それにより、資料の主人公と自分とを重ね合わせながら考えさせたい。

#### イ ワークシート活用の工夫

ワークシートに書かせることにより、自分の考えをしっかりと持たせたい。その後、ペアトークをしたり、話し合いをさせたりすることで、価値に対する自覚を深めさせたい。さらに発表する際に、「まこと」役を児童、「お母さん」役を指導者になって、役割演技させる中で、家族が自分のことを考えてくれているということにも気付かせることができる。

#### 執筆者より

家庭生活の中で、家族にしてもらっていることが、当たり前だと感じる子どもが増えてきている。子どもたちがこの資料を通して、当たり前を当たり前と思わず、家族に感謝し、家族の一員として自分も役に立とうとする気持ちが生まれることを願っている。

(横路小学校 木村 智子)